

幕張ベイタウンにおける住民主導型共創デザイン活動の特徴分析

日大生産工(学部) ○中島 杏那 ○高橋 明日香 日大生産工 吉田 悠

1. はじめに

これまで、地域や生活者の課題解決は自治体や企業のデザイナー、技術者が主導するのが一般的であった。しかし、3Dプリンタやノーコード技術の普及により、一般生活者（ユーザ）も課題解決のアイデアをデザインし実装することが容易になってきた。これに伴い、デザインの主体が専門家だけでなく一般生活者にも広がってきた。Sanders は、デザイン活動の方向が、デザイナーが人々のためにデザインする時代 (Design for People) から、「共にデザインする時代 (Design with People) を経て、今後は、誰もがデザインする時代 (Design by Ourselves) に変遷すると指摘している 1)。

「共にデザインする時代」および「誰もがデザインする時代」におけるデザイン方法論の一つにリビングラボがある。リビングラボとは、自治体や企業等のデザイン専門家と一般生活者とが長期的に課題解決に向けて共創していくデザインプロセスである 4)。そこでは、当事者である一般生活者を取り巻く生活環境の中で課題に対する解決策を検証し改善していくといったプロセスのデザイン活動が行われる 2)。これまでのリビングラボの事例として、福岡県大牟田市では、高齢者の認知症の増加という課題解決に向け、自治体と民間事業者が協力し、認知症ケアサービスを立ち上げた事例がある 3)。ここでは地域住民もデザイン活動に積極的に参加し、活動は 16 年間継続されている。また、東北では東日本大震災の災害公営住宅において企業、地域住民、大学が連携した事例が報告されている。ここではコミュニティの活性化を目的としたミニライブラリー等の創出がなされた 2)。

このように、自治体や企業、大学が主体となり地域住民を巻き込む共創型リビングラボの活動事例はいくつか報告されているものの、地域住民が主体の、いわゆる住民主導型リビングラボ 4) の活動事例はまだほとんど報告されていない。そこで本研究では住民主導型リビングラボの事例を取り上げ、活動プロセスと地域住民へのインタビューから、住民主導型リビングラボが継続する要因を明らかにすることを試みる。本研究が、今後様々な地域で住民主導型デザインプロセスを進めるための基礎的知見となることを期待する。

2. 幕張ベイタウングリスロプラス活動

本章では幕張ベイタウンにおける住民主導型リビングラボ活動「グリスロプラス」の内容を紹介する。まず、2.1 節で本活動のフィールドである幕張ベイタウンの特徴について述べた後、2.2 節にて、活動の開始～最初の実証調査を行った 2022 年度までの活

動を概説する。そして 2.2 節では、筆者らが活動に参加した 2023 年度以降の活動プロセスを紹介する。

2.1. 幕張ベイタウンの特徴

千葉県千葉市美浜区にある幕張ベイタウンは、21 世紀の国際業務都市を目指して開発された都心型住宅地で、魅力的な都市デザインと快適な居住環境が特徴である。1995 年に入居が開始され、現在では 40 街区 9,400 戸、約 25,500 人 (2020 年 5 月調べ) が居住している 6)。街はマンション型の建造物で構成され、電線類の地中化や廃棄物空気輸送システムが導入されている。大半の建物は、低層階に店舗で商店街が形成されている。交通は、海浜幕張駅から徒歩で 16 分、バスは 1 時間に 1~4 本の頻度で運行されている。

2.2. 開始～2022 年度までの活動概要



Fig.1 グリーンスローモビリティ

グリーンスローモビリティ (以下、グリスロ) とは、電動で、時速 20km 未満で公道を走る 4 人乗りのパブリックモビリティである 5)。幕張ベイタウン・ベイパーク地域では、グリスロの導入によって住民の移動を支援するだけでなく、多世代間のコミュニティ形成を目的に住民主導型リビングラボ活動が 2021 年から行われている。活動は、地域の介護福祉関係者の住民の、「高齢者にさらなる移動手段が必要」という問題提起から始まり、この課題意識に共感した複数の住民が集まりプロジェクトを立ち上げたことで活動が進められた。開始直後からは、自治体を巻き込んだグリスロの調達や道路交通規制の調整がなされ、2022 年 11 月に 2 週間の実証調査も実施された。現在は幕張ベイタウン自治会連合会の中の特別委員会のひとつとなっている。

2.3. 2023 年度の活動プロセス

2023 年度のグリスロの活動 (グリスロプラス) は、2022 年の実証調査のフィードバックを受け、グリスロを地域で本格稼働を目指した検討を行うことを目的としていた。活動の主な特徴として、コアメンバーによる「定例会」と、参加者のオープンな「交流会」を月一交互に開催し、さらに地域イベントとし

Characteristics of a residents-driven living lab activity in Makuhari Baytown

Anna NAKAJIMA, Asuka TAKAHASHI and Haruka YOSHIDA

て住民フォーラムや試乗会を実施した。

1. 定例会と交流会

定例会は、特別委員会の実働部隊が意思決定機関として機能し、交流会は、住民、行政、企業、大学等から参加者が自由に集い、定例会で決定した情報の共有や意見交換の行っていた。具体的には、ワークショップが実施され、グリスロの最適な走行ルートや新しいコンセプトを創出するための議論が行われた。そこでは、地域での生活に関する意見交換も活発に行われていた (Fig.2)。



Fig.2 コアメンバーへのインタビューの様子

2. 地域イベントとして試乗会とフォーラムの実施

2024年2月には、グリスロ試乗会と住民フォーラムを開催し、多くの住民が無料でグリスロを体験した。午後のフォーラムでは、他地域や大学有識者を招いた講演会や地域住民による座談会が行われ、110名以上の住民が参加した。イベントでは、グリスロを活用したまちづくりのビジョンを広く住民に発信した。

以上から、グリスロプラス活動は住民が主体となってリビングラボ活動として3年以上継続しており、住民の積極的な参加がなされている。この背景要因を分析するために、コアメンバーを対象にインタビュー調査を行った。次章ではその内容を述べる。

3. インタビュー調査

3.1. 対象者とインタビュー概要

グリスロプラス活動のコアメンバーの中から4名を対象にインタビューを行った (Fig.3)。対象者の属性を表1に示す。インタビューでは、(1)対象者のバックグラウンドについて、(2)グリスロプラス活動への参加きっかけ、(3)地域の特徴について、(4)本活動への参加のモチベーション、(5)グリスロプラス活動が継続して進んでいる要因、を質問した。



Fig.3 コアメンバーへのインタビューの様子

3.2. インタビュー結果

(1) 対象者のバックグラウンドについて

対象者	本活動での役割	就労状況	性別
Aさん	発案者、コアメンバー	現役 (介護福祉)	女
Bさん	コアメンバー	退職	男
Cさん	コアメンバー	現役 (会社員)	男
Dさん	代表者	退職	男

表1 インタビュー対象者の属性

この項目は、参加者が今までにボランティア活動経験の有無を確認し、コミュニティへの参加経験を明確にするために質問した。共通していたのは以下の3点であった。

- ・ 仕事で新しいことに取り組んだ経験がある
- ・ グリスロプラス以外にもボランティア活動に参加した経験がある
- ・ 地域で生活する中で強く実感する課題があった
具体的には3名が企画職や研究職、ビジネスモデルの作成の経験があり、4名全員がごみ拾いボランティアや夜間中学のボランティアに参加した経験を持っていた。更に2名が市民から相談や介護経験を通して、高齢者が安心して生活できる移手段や見守り支援の必要性を感じており、これらが地域活動への動機になっていると回答があった。

(2) グリスロプラス活動への参加のきっかけ

この項目は、参加者がグリスロプラス活動に参加したきっかけや理由を探る意図での、質問を行った回答は大きく2つに分かれる。

- ・ 課題に共感して参加した (2名)
 - ・ 声をかけられて面白そうだと思い参加した (2名)
- 課題に共感して参加した対象者は、本活動の発案者であるAさんと代表者のDさんであった。Aさんは、認知症患者が地域の助けを得て、自由に外出できるような環境づくりを目指し、Dさんは、過去の自身の介護経験の後悔から、「困っている人を助けたい」という使命感を感じていたこと、地域住民のニーズを把握するAさんからグリスロの構想を聞き、課題に共感して始めたと回答していた。一方、BさんおよびCさんは、知り合いから勧められたり試乗会でグリスロに乗ってみたりしたことが参加への興味を持ったきっかけとなったようだ。

(3) 地域の特徴に関すること

この項目は、幕張ベイタウンの地理的特徴や住民

特性を明らかにするために質問した。結果、地域の良い点として以下の点が挙げられた。

- ・住民の人間性の良さ(2名)
- ・物理的に綺麗な街であること(2名)
- ・住民の多くが、自分たちが街づくりをするという意識と他者を受け入れるオープンなマインドを持っていること(2名)
- ・街にモノや店が揃っていること(4名)

住民の多様な職歴や責任感、人懐っこさが評価され、転居者が多いことから多様性を受け入れる環境が形成されている。また、街の清潔さや活気に満足している一方で、街づくりの制限による店の出店状況には課題があるとの意見も出された。

次に、課題となる点として以下の点が挙げられた。

- ・高齢化(4名)
- ・住民のコミュニケーションの場の喪失(2名)
- ・街づくりに対する制限(1名)

高齢化はインタビュー対象者全員が共通して意識している課題であり、そのうちのグリスロ発案者は上で述べた通り、高齢者の移動手段不足や認知症患者の家族負担等に強い問題意識を抱いていた。

さらに、マンションのオートロックによる偶発的コミュニケーションの欠如が住民間の交流の減少や、「高齢者の見守りが難しい」という課題の要因にもなっているとの意見があった。また、街のブランディングを意識する住民が多く、飲食店の出店等に制限がかかっていることも課題として挙げられた。

(4)参加のモチベーション

この項目は、グリスロプラス活動に継続的に参加するモチベーションを明らかにするために質問し、以下の点が共通して挙げられた。

- ・新しい体験ができること(2名)
 - ・グリスロの価値を見出し導入したいという意識(2名)
 - ・地域住民から感謝されること(2名)
 - ・参加メンバーや住民との良好な関係の維持(3名)
- 新しい体験ができることに関しては、乗車時に感じる非日常感や、自分の考えた企画が通りやすいこと等から、刺激を受けられ楽しい等の意見が出た。

グリスロに対する価値を感じている参加者は、グリスロが幕張の抱える問題の解決策となりえると信じており、活動への継続的参加のモチベーションとなっている。

また、地域住民から意見や感謝を受けることがモチベーションにつながるという意見が出た。

さらに、人とのつながりや、新たな人間関係の構築も重要な要素として挙げられており、グリスロプラスが居場所となっていることも活動の魅力とされている。

(5)グリスロプラス活動が継続して進んでいる要因

この項目は、参加者が感じているグリスロプラス活動が継続要因を明らかにするために質問した。結果、3名に共通した回答として「(A)住民の幸せが個々人のモチベーションとして機能しているから」

「(B)多様性を前提に、活動への参加の度合いは個々人に委ねられているから」があった。また、2名に共通した回答として「(C)コミュニティとしての向上志向があるから」「(D)活動の目的が共有できているから」があった。さらに1名から「(E)参加メンバー

が地域の課題に共感しているから」との回答があった。

4. 考察

インタビュー結果より、対象者が考える本活動の継続要因を次の5項目に整理することができた。

- (A)住民の幸せが個々人のモチベーションとして機能しているから
- (B)多様性を前提に、活動への参加の度合いは個々人に委ねられているから
- (C)コミュニティとしての向上志向があるから
- (D)活動の目的が共有できているから
- (E)参加メンバーが地域の課題に共感しているから

本章では各要因が本活動において成立した背景を参加メンバーの特徴、地域の特徴、活動プロセスの特徴、の視点で考察する。

(要因A) 住民の幸せが個々人のモチベーションとして機能している

本要因は、グリスロの実証調査や試乗会で住民から感謝される経験が、参加メンバーの大きなモチベーションとなっていることが指摘された。「自分の手で住民を幸せにできる」という実感が、活動を継続する原動力となっている。インタビュー結果「(1)対象者のバックグラウンド」にもあるように、多くのメンバーがボランティア活動の経験を持っている。今回のインタビュー対象者はコアメンバーの一部だが、以上の結果から、おそらくグリスロプラス活動の参加メンバーの多くは同様の経験を持っていると推察される。そのため、活動に対する住民の反応や喜び、感謝の声に、多くの参加メンバーはやりがいを感じ次々のモチベーションとして機能し、結果的に活動が継続していくと考えられる。

(要因B) 多様性を前提に、活動への参加の度合いは個々人に委ねられている

本活動の参加者は、地域課題に関心を持つ人、退職後の居場所を求める人、他者との交流を楽しむ人、グリスロプラスの活動におもしろさを見出す人等、参加の理由は様々である。多様な価値観の人を受け入れたコミュニティはこれまでにない新しい経験ができる居場所であり、活動が楽しいという意見があった。インタビュー結果「(2)活動への参加のきっかけ」が大きく2パターンに分かれていたことや「(4)参加のモチベーション」が様々であることから、参加メンバーの活動理由は多様であると考えられる。このような多様性を受け入れる土壌として、「(3)地域の特徴」で挙げられていた「人間性の良さ」や「他者を受け入れるオープンなマインド」の存在が関係していると考えられる。温かく、人の意見を否定せずに話し合い受け入れることができるこの地域の住民の特徴が、居心地の良いコミュニティ形成に貢献していると考えられる。適度に緩やかな人とのつながりによって活動への参加のハードルを下げて心地よい関係作りが可能となり、結果的に参加メンバー数が維持および増加し、活動が活発化すると考えられる。

(要因C) コミュニティとしての向上志向がある

参加者は、活動をより良くしようという向上心を持って取り組んでおり、この姿勢が活動の継続を支えている。要因として、インタビュー結果「(1)対象者

のバックグラウンド」の「仕事で新しいことに取り組んだ経験がある」ことや「(3)地域の特徴」の「自分たちが街づくりをしようとする意識」があると考えられる。インタビュー対象者4名中3名が、工場の立ち上げ企画やビジネスモデル作り等、仕事で新しいことに取り組んだ経験があったことから参加メンバーの多くも同様の経験を持っていると推察される。また、住民が皆外から来たからこそ、開放的なマインドで多様な人を巻き込み自分たちで価値ある街を作り上げたいという意識が強く、これらの特徴がコミュニティとしての向上志向につながっていると考えられる。

(要因D) 活動の目的が共有できている

グリスロは移動手段であるが、グリスロプラス活動に参加するメンバーの大半が、この活動の目的が単に地域に移動手段を提供することではないと認識している点が興味深い。インタビュー対象者4名全員は、グリスロの価値は単なる移動手段に留まらず、利用者や運転者、添乗員との直接的なコミュニケーションや、グリスロを目にした住民との間接的なコミュニケーションを通じて、地域のつながりを広げていくことだと認識している。これにより、住民同士が緩やかにつながり、地域の変化が促されている。このような活動の目的は、定例会と交流会」で定期的に行われるワークショップを通じて参加者間で共有されており、活動目的が共通理解として広がっていることが、活動の一体感と継続を支えていると考えられる。

(要因E) 参加メンバーが地域の課題に共感している
インタビュー対象者は4名全員が、本活動のきっかけとなる幕張地域の課題として、高齢者が外出するための移動手段が少ないことを挙げており、うち2名はその課題の当事者（高齢者の家族または介助者）という立場もあり強く共感していた。必ずしも課題の当事者ではない参加メンバーが地域の同じ問題に共感できている背景には、(要因D)と同様、「定例会と交流会」での交流ワークショップにおいて参加メンバーが互いの問題意識や価値観を共有していたためと考えられる。また、3.2節の「(3)地域の特徴」で挙げられていた住民の「人間性の良さ」や「他者を受け入れるオープンなマインド」により、他者の価値観を受け入れ課題に共感できていると考えられる。

5. おわりに

本研究では、住民主導型リビングラボの事例として、幕張ベイタウンのグリスロプラス活動に焦点を当て、その継続要因を明らかにすることを試みた。開始からこれまでの活動プロセスの分析と、参加メンバーへのインタビュー結果から、5項目を活動の継続要因として抽出した。また、これらの要因が成立した背景を、参加メンバーの特徴、地域の特徴、活動プロセスの特徴の視点で考察した。

本研究の目的が、様々な地域で起こる住民主導型リビングラボ活動を支援するための基礎的知見の提供であることから、今後は、今回抽出した要因が他の地域でも成立可能かを検証するために、他の地域の事例分析と要因の比較検討を行う必要がある。さら

に、住民主導型リビングラボ活動を効果的に進めるためのツール群を幕張ベイタウンの住民の方々と一緒にデザイン・開発することで、本活動、ひいては、住民主導型リビングラボ活動のさらなる発展に貢献していきたい。

謝辞

本論文を執筆するにあたり、インタビューにご協力いただいた幕張ベイタウングリスロプラスのコアメンバーの皆様に深く感謝いたします。また、住民主導型リビングラボ活動の継続要因や他地域との比較について議論させていただいた千葉市美浜区役所、および交流ワークショップに参加いただいた千葉市都市局都市部交通政策課の職員の皆様に深くお礼申し上げます。

参考文献

- 1) E. B. N. Sanders, “Co-creation and the new landscapes of design,” *International Journal of CoCreation in Design and the Arts*, Volume 4 (1), pp. 5–18, 2008.
- 2) 赤坂文弥, 中谷桃子, 井原雅行, 本江正茂, “リビングラボにおける生活者との共創の進め方”, *デザイン学研究*, 2020, 67巻, 3号, pp. 3_19-3_28
- 3) 木村篤信, 草野孔希, 赤坂文弥, 渡邊浩志, 井原雅行, “住民・地域包括支援センター・企業による地域密着型リビングラボ”, *日本デザイン学会研究発表大会概要集*, 2018, 65巻, セッション ID D7-01, p. 284-285
- 4) Leminen, S., “What Are Living Labs?”, *Technology Innovation Management Review*, 5(9): pp. 29–35, 2015.
- 5) 国土交通省, *グリーンスローモビリティ*, (2024) https://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/environment/sosei_environment_fr_000139.html (参照 2024-3-29)
- 6) 千葉市, *幕張ベイタウン*, (2024) <https://www.city.chiba.jp/sogoseisaku/miraitoshi/makuhari/makuharishintoshinbaytown.html#aytown>, (参照 2024-10-16)